

…… {補 足} ……

…現状分析と活動指針の方向性…

第二次サイクリングブームからのめり込み、MTBブームを仕掛けた側に居た立場からの分析は、大きくは間違っていない！？(注0)

自主企画の「とれとれバイク」「ブルベ」「自転車さんぽ」、さらにメーカーや行政のイベント運営で、関連団体や警察と情報交換し、また、建設コンサルタントや環境団体との交流もあって様々な角度から自転車走行環境を検証している。そして震災を挟んで、日本の自転車事情のコアな部分に同席する機会を得て、“日本の道”や“楽しむ環境”は、自転車にとって未だ不連続(注1)だと再認識した。

そのひとつに自転車の日常利用とスポーツ利用の二面性(注2)がある。その隔たりを「自転車さんぽ境界線(注3)」で埋めたい。年齢性別車種不問で楽しみ、主催者の大小や目的を選ばない「THT26♦♦自転車さんぽ」は、日本のどこの街でも実施可能なように、普通の道を普通に走るための工夫が施されており、その可能性を秘めている。そして、その新たなキーワードを共有するための自転車版賢人会議「山の辺の道サミット(注4)」も提案したい。

インフラ整備の必要無い自転車ソフトの重要性(注5)を訴えるには「山の辺の道サミット」だけでは不十分なため、地味ソフト「THT26」の欠点を補う「4タイムズ提案」や、47都道府県に100km推奨コースを設定する「ハンドレッド・パイ・ハンドレッド」や、山道をMTBで走る法的根拠を考える「シンキングMTB」などの、自転車ソフト3原色の実証実験を多くの関係者に見える形で継続したい。

その見える形での提案として、複数媒体とのタイアップページや、旅行カウンターにも置ける自転車旅冊子の配布を考えており、そのページタイトル「B×C(バイシクル・パイ・シクロ)★」は、“自転車遊びは十人百色”や“自転車多様性”という意味。そして『Ver.2・6』は、全国のサイクルショップで「春番でソフトも売ろう！」(注6)の確立が前提の『Ver.3』へ向けてのアイドリング期間であり、自転車旅の商品化に向けた課題(注7)を探る。

(注0)「転遊研」の発想に至った過程で、MTBブームの仕掛けと、その後退を見たことで、ハードとソフトのタイムラグや、人材育成やインフラの不備を、身を持って体験！

(注1)“物理的”な道や施設や標識、“制度的”な休日事情や交通基本法、“精神的”な安全管理や責任の所在や市民権、“企画的”な交通システムやイベントやインフラ整備。

(注2)日常利用(歩行的利用/速い・1時間以内の使用) ↔ スポーツ利用(自動車の利用/速い・半日以上移動)

(注3)日本の特殊事情として溝を作っているだけで、本来は境目の無いグラデーションゾーン！

(注4)関係者の勉強会(時代で変化するグラデーションゾーンの認識)は絶対に必要。理論のパート！

(注5)日常利用の中にスポーツ利用を融合し市民権(特殊条件のイベントでは理解を得られない)を構築する。実践のパート！

(注6)日本の実情にあった自転車ソフト充実(多様化と開催数)が達成されてこそ、全国のサイクルショップや旅行カウンターで紹介が可能！

(注7)自転車ソフトの多様化に合わせたセキュリティの整備(責任の所在、保険、緊急対応)が急務！注5・注6を全国展開する際の最大のハードル！

★「B×C(バイシクル・パイ・シクロ)」は、2016年を目標に全国のサイクルショップで「春番でソフトも売ろう！」を標榜する『Ver.3』へのアイドリング期間としての『Ver.2・6』の旅籠企画で、「ポタリング」「ファストララン」「マウンテンバイク」の自転車遊び三原色のB×C的情報を、3つの媒体で定期リリースするものです。。。

